

*** 今日の健康 (12月) ***

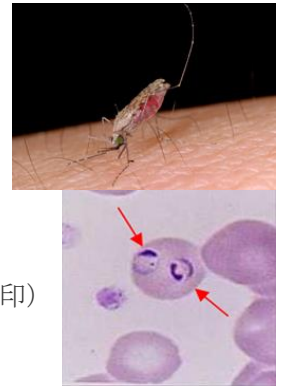
< 地球温暖化と感染症 ②マラリア >

マラリアは世界で年間約 2 億 1,000 万人が罹患し、63 万人が死亡する最も重要な感染症の一つで、マラリアを媒介するハマダラカが生息するためには最低気温が一定以上であることが必要で、そのため世界のマラリア分布は社会インフラが整備された地域を除き、気候条件によってほぼ規定されています。温暖化により冬の気温が上昇すると、マラリア流行地域の辺縁地域でハマダラカが生息できるようになり、マラリア流行地域が拡大する可能性があります。

将来の温暖化予測に基づいた研究では、2080 年世界の総人口 80 億人のうち 2 億 6,000 万～3 億 2,000 万人がマラリア流行地域に居住すると推定され、現在に比べてマラリア感染のリスクがある人口が 2～4% 増加すると推察されています。

写真は上：ハマダラカ、下：ヒトの赤血球内に寄生するマラリア原虫（赤矢印）

出典：[国立感染研究所ホームページ「衛生昆虫写真館（新館）」](#)



マラリアは原虫の感染によって起こる熱病で、蚊が原虫を媒介します。ヒトに感染するマラリア原虫には熱帯熱、三日熱、四日熱、卵型の 4 種類があります。

現在、日本国内でマラリアの流行はありませんが、日本では、明治時代からマラリア患者発生の報告がありました。1930 年代でも 5,000 から 9,000 人の患者が報告されていました。第二次世界大戦後に 500 万人を越す復員者によってマラリアの再流行が危惧されたものの、1946 年の 28,200 人をピークに 1951 年以後、国内感染例は急速に見られなくなりました。近年、マラリアの流行地域に滞在中にマラリアに感染し、帰国後に日本国内で発症する例が毎年 50～100 人報告されています。この中には診断や治療の遅れから死に至った例もあります。マラリアは感染している患者と媒介蚊、蚊の生息条件が調わないと発生しません。この条件が温暖化や大規模な自然災害などによって変化すると、“再発・再流行”する可能性があると言えます。

< 症 状 >

感染後 10 日程経過してから、発熱 (38.0℃以上)、倦怠感といったインフルエンザ様の症状がでます。熱帯熱マラリア以外のマラリアでは、潜伏期間が 10-30 日と長期になることもあります。発熱には周期性があり、マラリア原虫の種類によって 48 時間毎か 72 時間毎の発熱になります。熱帯熱マラリアでは周期性がなく常に熱があることが多いようです。マラリア原虫は血液中の赤血球に好んで寄生し発熱は、周期的に赤血球が破壊されるタイミングにおこるといわれています。症状が進行すると、貧血、黄疸などが出現します。

< 予 防 >

マラリアにはワクチンがなく（現在開発中）、予防には蚊対策が重要です。ハマダラカは夜間吸血する習性があり、日没後は外出せずに室内に留まれば感染のリスクは軽減されます。殺虫剤や蚊取り線香などで防御することも必要です。屋外では肌を露出しない服装（長袖・長ズボンを着用）をするとともに、虫よけスプレーも必需品です。内服薬による予防もありますが渡航など必要な人は医師に相談して下さい。

< 診 断 ・ 治 療 >

マラリアの確定診断は血液を顕微鏡で鏡検して赤血球中のマラリア原虫の存在を確認します。マラリアの迅速検査キットもありますが国内の一般的な医療機関には置いてありません。マラリア流行地域に滞在中や滞在後に発熱したら、必ず早めに、熱帯病の診断・治療ができる医療機関を受診しましょう。「最近、流行地への渡航歴がある」と、医師に伝えることが大切です。

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861

天文台通り多摩信用金庫のななめ裏